

日本生活科・総合的学習教育学会

第3回シンポジウム・ワークショップ開催のお知らせ

平成16年11月23日（火） [祝日] 10:00～16:30
立教大学池袋キャンパス 参加費1500円 当日受付

昨年のシンポジウムでは「ものづくりの楽しみと挑戦心」として職人さんやシェフといったプロ意識をお持ちの方にご登場願いました。教師のものの見方と異なる視点からのお話が新鮮で、「自分自身を見つめ直すよい機会となりました。」等の感想が参加者から聞かれました。今年のシンポジウムも、後半の上杉賢士先生の講演も私たちの視野を広げてくれることでしょう。どうぞご期待ください。

午後のワークショップは6コーナーです。

毎年このワークショップを楽しみに来られる方が多くいらっしゃいます。昨年は手織りや工作などの製作活動から子どもの「学び」を考える研究協議まで多彩な内容でした。今年も「為すことによって学ぶ」実践的なものばかりです。参加者同士のふれあいや情報交換もワークショップならではです。

木々が色づいた大学キャンパスを歩くのもおすすめです。今年も多くの方の参加をお待ちしています。

～シンポジウム～

- 9:30～ (受付)
10:00～11:30 *シンポジウム「他国での学校生活を体験して」
コーディネーター 筑波大学 谷川 彰英
パネラー 帰国子女及び留学生の方々
11:30～12:10 *講演 「チャータースクールに学ぶ」
講師 千葉大学 上杉 賢士

～ワークショップ～

13:20～14:50 (ワークショップ1)

授業づくりのポイント

栃木県いちごの会

石井 智子
町井 富子

食から生きることを学ぼう
穀物と私たち—うどん、そば、だんごをつくってみよう—

東京都文京区立柳町小学校
小山 隆彰

身近な草や木
で自然体験

ミュージアム
パーク茨城県
自然博物館

まほうの竹笛

相模川自然の村
野外体験教室

阿部 高美
佐々木 隆

15:00～16:30 (ワークショップ2)

プロジェクト・ベース学習
の企画と支援の方法Ⅱ

千葉大学
市川 洋子

デジカメをもって出かけよう

埼玉大学教育学部附属小学校
岡野 雅一
川越市立川越西小学校
若手三喜雄

根本 智

※終了後(17:00～)、懇親会を行います。
みんなで情報交換をしましょう。
当日受付でお申し込みください。
(会費5000円)

一問い合わせ先

神奈川県立総合教育センター
人材育成課 新倉美和子 三堀 仁
〒251-0871 藤沢市善行7-1-1
TEL 0466-81-1635 FAX 0466-84-2040
[E-mail: niikura@edu-ctr.pref.kanagawa.jp]

日本生活科・総合的学習教育学会第3回シンポジウム・ワークショップ

講演 チャータースクールに学ぶ

講師 千葉大学 上杉 賢士 先生

〔講演の概要〕

○チャータースクールとは

1991年ミネソタ州でチャータースクール法が制定されたのが最初である。「特色ある学校を作りたい」と願う人々によって提出された企画書が州議会に認められ、「公立学校」として誕生した学校をいう。

自分たちの考へで思い切った教育ができる

反面、説明責任や結果責任が問われ、審査によって十分でないと判断されると廃校になる学校もある。学力の向上を共通項にしながら、学習障害児のための個別カリキュラムを用意した学校、非行犯罪歴のある子を受け入れる学校など、チャータースクールの数だけ教育の仕方がある。



○ミネソタ・ニューカントリースクールの取組

チャータースクールの中でも注目すべき取組の一つとして、ミネソタ・ニューカントリースクールのプロジェクト・ベース学習がある。

ミネソタ・ニューカントリースクールは、中・高一貫のチャータースクールである。生徒は1年間に10個のプロジェクトを行い、自分で自分の学びのコースを作っていく。いわばオーダーメイドの学習である。数学以外は、自分の興味関心を中心にやってみたいテーマを追究する。プロジェクトの成果はプレゼンテーションで発表される。その評価は評価チームによって行われる。プロジェクト・ベース学習を通して、生徒は知識の量より生涯にわたって学ぶための資質や技能を身につけることができる。同時に州の定めた履習基準（日本の学習指導要領に相当する）も満たす。

そのために教師は、講義や指示をするのではなく、情報提供者・学習活動の参加者となる。教科の専門家ではなく生徒の自主的な学習を支援するアドバイザー、ファシリテーターの役割を果たす。

〔受講者の感想より〕

学ぶ側に重点を置いたプロジェクト・ベース学習には、これからの中等教育が目指していくにあたってのヒントがあった。特に総合的学習では、児童自らが学びを作り上げていくための手がかりとして有効だと思う。

当日は、約100名の参加者がありました

チャータースクールに学ぶ

千葉大学 上杉 賢士

日 月 日曜日

日 月 日曜日

日 月

前回

1. 4年にわたる視察経験から

- 教育の自由と引き替えに生じる結果責任
- チャータースクールの数だけ教育の仕方がある
- フレームとコンテンツ
- ミネソタ・ニューカントリースクールのプロジェクト・ベース学習への注目

2. なぜ、プロジェクト・ベース学習か

- 世紀の変わり目で起きている変化
- 社会が求める資質・能力の変化
- 現代に期待される学びとは

3. MNCSで開発したプロジェクト・ベース学習の特報

- プロジェクト・ベース学習の意味
 - * 学習プログラムの全体
 - * 学び方を学ぶ
 - * 広く学際的
 - * オーダーメードの学習
- 教師の役割の変化
 - * 講義する人・指示する人 → 情報提供者・学習活動の参加者
 - * 専門家 → アドバイザー・ファシリテーター
 - * 作品やテスト・情報の複製 → プロセス・パフォーマンス
- 生徒の役割の変化
 - * 教師の指示による活動 → 自発的な学習、役割や時間の管理、パフォーマンス
 - * テストでいい点を取る → 生涯にわたって学ぶための資質や技能を身につける
- 評価の変化
 - * 評定 → アセスメント、生徒の自己評価
 - * 知識の記憶量 → 社会人として必要な資質・能力
 - * 指導、そして評価 → 指導と評価の一体化

4. プロジェクト・ベース学習の導入に必要な条件

- 企画立案・問題追究の援助
- 評価観の転換、評価規準の作成
- アドバイザーとしての成長

プロジェクト・ベース学習企画書 Ver. 5

デジカメをもって、 でかけよう！

埼玉大学教育学部附属小学校
川越市立川越西小学校

岡野 雅一
若手三喜雄

～教材研究の視点を共有しませんか～

生活科の授業づくりをするときに、改めて地域を見直すことは言うまでもない。地域を見直す際には、拠点となるような場所を探すことが大切になってくる。例えば、小さい子からお年寄りまで人々が集まっていて、活動する中で人とのかかわりが期待できるような場所。また自然が豊富で、生き物をつかまえたり、花を摘んだりする中で、自然とのかかわりを深めることが期待できるような場所。そこで活動をきっかけとして単元を構成できるような場所。このような視点で地域を見直し、生活科の授業づくりに取り組むことが大切になってくる。

そこで…

デジカメをもって、地域に出かけてみる。生活科の町探検について教材研究するといった設定で、「この場所ならば、このような活動が予測できる。そして、このような効果が期待できる。」ということについて、デジカメの映像とともに持ち帰る。持ち帰ったら、参加者で発表会をする。

それにより…

日頃悩んでいる教材研究の方法や視点について、みんなで共有することができる。

- ここでは、次のような方法や視点で教材研究を行います。
- ① グループに1つデジカメをもって、町に出かける。
 - ② 活動が充実し、町探検の目標を実現できるようなお店や建物などを探して、撮影していく。
 - ③ その場所で、子どもがどのような思いや願いをもち、どのような活動に取り組むことが予測できるかを考える。その結果、どのような子どもの姿が見られるようになるかを想定する。
※③が教材研究の視点です。
 - ④ 会場にもどって、グループごとに考えた①～④のことについて発表会を開く。

だから、このワークショップに参加すると…

町探検の教材研究の手法が身に付いてくる！

さあ、みんなで楽しもう！

町探検の教材研究

まほうの竹笛

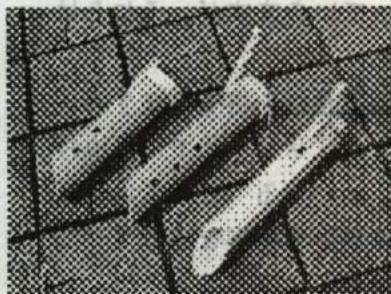
相模川自然の村野外体験教室

「まほうの竹笛」画企の担当者・佐々木 隆 阿部 高美

(真実形振舞一やくせ合備育達開拓学育達大葉子) 千葉市

竹を使っておもしろい笛を作り、みんなで演奏会をしましょう！

私たちの施設では、相模原市内の小中学生が宿泊して、様々な体験活動を行っています。



この竹笛は、特に人気のある活動で、ただ音が出るだけでなく、楽器やCDにあわせていろいろな曲を演奏することができます。材料は、大名竹とよばれる細めの竹です。

のこぎりや、鉈、ドリルなどの道具を使って、竹を笛にしていきます。

普段、このような道具を使うことが少ない子どもたちにとっては、竹を切るだけでも一苦労。でもがんばって作り上げたときの嬉しさもひとしおです。

音楽の時間に練習するリコーダーのように、おさえる指が決まってないのもこの笛の特長です。手のひらで調節しながら音を探していきます。

少し練習したらいいよい演奏会。

「大きな古時計」「世界に一つだけの花」「ビリーフ」などみんなの好きな曲をふき、楽しめます。

【容 内】

竹笛の他にも、身の回りのもので音が出せるものなども紹介します。

たくさんの先生のご参加をお待ちしています。

式の儀のイエロード

式式式式式式式式

式式式式式式式式

式式式式式式式式

ワークショップ2

プロジェクト・ベース学習の企画と支援の方法Ⅱ

市川洋子（千葉大学教育学部附属教育実践総合センター特別研究員）

ミネソタ・ニュー・カントリー・スクール（米国、ミネソタ州）は、自立した有能な社会人の育成を目指して10年前に開校された、中・高一環のチャータースクールです。ここで開発されたカリキュラムは、数学以外はすべてプロジェクト学習というとてもユニークなものです。生徒は、1年間に10個のプロジェクトを行なっていきますが、それらはすべてその生徒の興味・関心を基軸に展開していきます。

チャータースクールは、カリキュラムの編成から人事まで自由裁量権を得ていますが、成果を上げなければ廃校、という厳しい結果責任も負っています。ミネソタ州では、高校の卒業には、州で決められた試験に合格しなければなりません。いわゆる（日本でいうところの）総合的な学習ばかりやっているにもかかわらず、非常に高い合格率を出しているこの学校のプロジェクト・ベース学習とは、いったいどういったものなのでしょうか。

1992年、上杉氏（千葉大学）によって、そのプロジェクトの企画立案のワークショップが開かれましたが、その後の訪問や理論書の翻訳を通して、新たな事実が判明しました。そこで、今回“II”と銘打って、前述の秘密を解き明かしていきます。

日本の教育事情は違うからできっこないと思われている方は、ぜひこのワークショップに参加してください。そして、90分という短い時間ではありますが、日本の総合的な学習や本当の学びに対して多くの示唆を与えるプロジェクト・ベース学習を体験してください。

【内 容】

- ① プロジェクト・ベース学習の学校紹介
- ② プロジェクト・ベース学習とは
- ③ 学習企画立案の方法
- ④ プロジェクトの進め方
- ⑤ 評価の考え方と方法
- ⑥ 評価規準の作成
- ⑦ 教師の役割

食から生きることを学ぼう

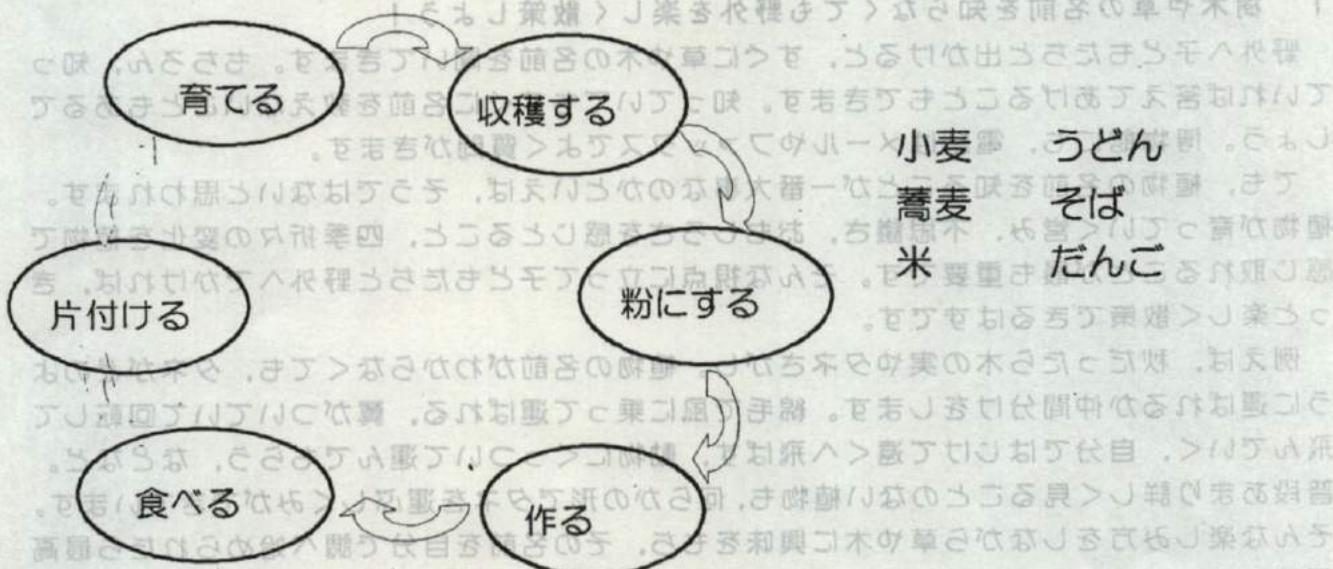
穀物と私たち—うどん、そば、だんごを作つてみよう！

東京都文京区立柳町小学校

小山 隆彰

著 本財 節約自然自給社会の一歩として

◎ 食べることは生きること。子どもの五感を解放させる伝統食にチャレンジ！



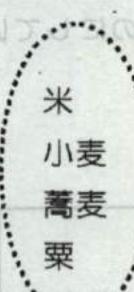
○子どもの経験と成長に応じて活動が選べます。

○学校や地域の実情に応じて栽培が可能です。

○地場産の穀物を通して人々との交流ができます。

◎食べ物を口にするまでを学び、自然と人間について考える子どもに。

《ワークショップには次のものを準備》



うどんにする

“団子”（小麦粉+水+塩）

を作って持ち帰り

自宅で切ってうどんに

箸
竹
串
を作つてみましょう

参考図書
道具類

身近な草や木で自然体験

タネはふしきだね！&木でバードコールをつくろう！&野草で紙をつくろう！

講師 山川

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 根本 智

1 樹木や草の名前を知らなくても野外を楽しく散策しよう！

野外へ子どもたちと出かけると、すぐに草や木の名前を聞いてきます。もちろん、知つていれば答えてあげることもできます。知っていてもすぐに名前を教えないこともあるでしょう。博物館にも、電話はメールやファックスでよく質問がきます。

でも、植物の名前を知ることが一番大事なのかといえば、そうではないと思われます。植物が育っていく営み、不思議さ、おもしろさを感じとること、四季折々の変化を植物で感じ取れることは最も重要です。そんな視点に立って子どもたちと野外へでかけば、きっと楽しく散策できるはずです。

例えば、秋だったら木の実やタネさがし。植物の名前がわからなくても、タネがどのように運ばれるか仲間分けをします。綿毛で風に乗って運ばれる、翼がついていて回転して飛んでいく、自分でじけて遠くへ飛ばす、動物にくっついて運んでもらう、などなど。普段あまり詳しく見ることのない植物も、何らかの形でタネを運ぶしくみができています。そんな楽しみ方をしながら草や木に興味をもち、その名前を自分で調べ始められたら最高です。

2 草や木の性質を利用した体験活動を！

ドングリを集めてきて人形をつくるのも楽しみの一つです。でも、それだけで終わらずにさらに草や木のそれぞれの性質や特徴を、体験しながら学べたらさらに最高です。

例えば、木を削ってみる、においをかいでのみる、違う種類の木をこすりあわせてみる、そんな活動をしているうちに、鳥をよぶ「バードコール」ができていたら、それをもって野外へでかけることができます。

例えば、みんなに嫌われているセイタカアワダチソウから紙ができたら、普段使っている紙に対する見方も変わるかもしれません。身近な草や木を、さらに身近なものにしていけたらいいですね。

今回のワークショップでは

タネはふしきだね！（前半）

外へでて見つけてきたタネと、用意してあるいろいろなタネの仲間分けをしたあとに特に飛ぶタネの模型をつくって飛ばしてみたり、シャボン玉や笛にして音を出したりします。

木でバードコールをつくろう！&野草で紙をつくろう！（後半）

ケヤキやヒノキなどの木を削ったりして、鳥の鳴き声をまねて呼び寄せるバードコールをつくります。さらに身近な野草から紙をつくる紙すきをします。野草ではないですがバナナの皮でも紙づくりもします。

「授業づくりのポイント」

ザ・ストップ - 子どもの表情から見取りと支援 -

コーディネーター 石井 智子
プレゼンター 栃木県いちごの会（数名）

- ### ○ どんなワークショップなの?

生活科・総合的な学習を支援している私たち教師は、日常の授業の中で子どもたちの活動を見取り支援していますが、その見取りと支援は、評価規準はあるものの、支援者の主観によるところが多いと言うことがいなめません。

そこで、今回は、子どもの活動（生活科）の一部分を映像で参加者の方に視聴していただき、「あなたがこの場の支援者なら、今見た子どもの活動を子どもの表情からどのように見取るか」補助資料の中から考えていただき、参加者全員で話し合い、見取りと支援について再度考えてみようという主旨のワークショップです。

- ### ○ どうやって話し合うの? (一場面15分×3場面)

補助資料配布 ⇒ ビデオ視聴（2～5分）⇒ 見取りタイム ⇒

- ・活動紹介文
- ・見取り補助簿
- ・生活科の活動
- ・見取り補助簿の中から自分の考えにあうものに○をつける

⇒ 話し合いタイム（7分～9分） ⇒ END

- ・プレゼンターの進行により、どんな見取りができるのか、それまでの支援はどうであったかを吟味し合う。

- ### ○ 何に役立つの?

今回の子どもの活動場面（ビデオ映像）は、教師の私たちが見取りを行う場合に悩んでしまう場面を選んでいます。だから、見取りが日頃スムーズに行えている方は、ご自分の実践と比較して見取りと支援の腕前のアップに、そうでない方は、見取りを行う場合の留意点チェックとよりよい支援の在り方の参考になると思っています。

- #### ○ タイムスケジュールについて

1回のワークショップにかかる時間は、45分程度です。しかし、活動場面（ビデオ映像）を3つ準備したので、15分で他のワークショップに移動することが可能です。

☆ 「いちごの会」とは、栃木県の生活科・総合的学習教育学会の愛称です。

イチローに学ぶ

日本生活科・総合的学習教育学会

会長 谷川 彰英

今年はアテネ・オリンピック、パラリンピックなど、日本の若者たちの活躍が目立った1年であった。これならまだ日本もいけるのでは、という期待を感じさせてくれた。

また、メジャーリーグではイチローの活躍もおおいにファンを魅了させてくれた。年間262本のヒットを打つという偉業を達成したイチローは、記者のインタビューに対して、「大記録をうち立てようとしてきたわけではなく、今ある自分を一步でも引き上げようとしてただけです。」というようなコメントをしていた。

このコメントは教育学的に見れば、どういうことになるか。

このコメントに見られるのは、ある特別の目標（例えば三冠王をとるとか）に向かって突き進むということではなく、今ある自分の可能性を開いていくという姿勢である。これは教育の本質を考えるのに示唆を与えてくれている。

私流に言わせれば、目標に向かって突き進む姿勢は鉄棒につかまってクリアしようとするところから「鉄棒式」と呼び、後者の姿勢は、今あるところから一歩ずつ前進しようとするところから、「雪だるま式」となる。イチローの姿勢は雪だるま式である。つまり、ある目的をおいてそれを達成しようとしてがんばるのではなく、自分にできることを当たり前にやっていく中で成長させようとする姿勢である。記録はそのあとについてくるという考え方である。これはなかなか考えさせる話である。

最近の教育動向を見ていて危機感を募らせるのは私一人であるまい。ゆとり教育批判から始まった基礎・基本の徹底論、さらに評価規準による評価の徹底など、まるで子どもたちに大きな網をかけて自由な発想や成長を妨げているように見える。もともと教育の本質は子どもの可能性を発見し、それを開いてあげることであったはずなのに、その本質が見逃されている。

先日ある研究会に呼ばれていったら、冒頭の挨拶に立った校長が、「世間の動向や学者の言葉に惑わされず、子どもから出発しましょう。」と語っていた。その席に私もいたのだから、かなり大胆な発言ではあるのだが、私は心から拍手を送った。

特に小学校では、いずれの教科でも「好き」にさせることが先決だし、それにつきるといつても過言ではない。難しいことはどうでもいい、とあえて言いたい。次の授業が待ち遠しいと思えるような授業をすることである。

そして、生活科・総合的な学習の目指すものは、子ども一人ひとりに「自分の好きなもの」を発見させ、それを核にした学びを保障することである。